

モモの収穫後管理

県北農林事務所伊達農業普及所
JAふくしま未来伊達地区モモ生産部会

1 気象経過

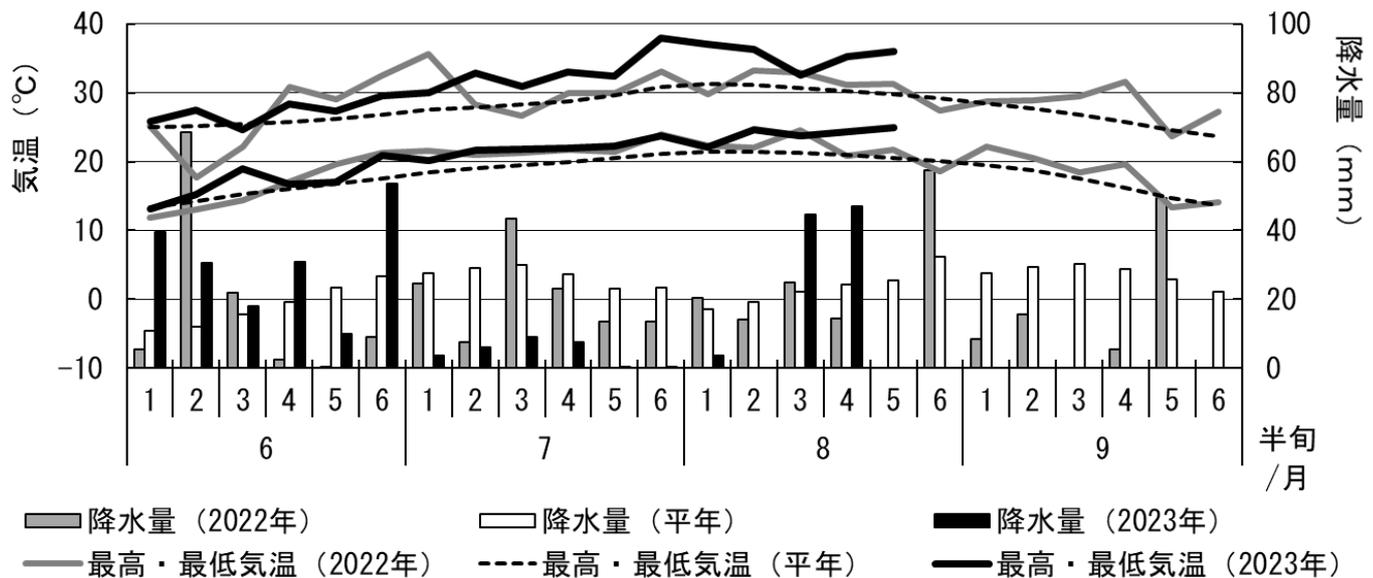


図1 気温と降水量の推移（観測地点：伊達市梁川町）

2 施肥

(1) 礼肥

樹勢に応じて、礼肥の施用量を調節しましょう。

収穫後に低下した葉の樹勢を回復させ、次年の生産に向けた花芽の充実および貯蔵養分の蓄積を図るため、礼肥を施用する。

礼肥は、ノルチツソなどの速効性の肥料を用い、収穫が終了した品種では、9月上旬頃に施用する。

施用量は、樹勢が弱い～標準の樹では、窒素成分で2～3kg/10aを目安とする（表1）。なお、凍霜害により着果が少ないなど、樹勢が著しく強い樹では、新梢の二次伸長を防ぐため礼肥は施用せず、元肥をやや早め（9月下旬頃）に施用する。

表1 礼肥の施用量の目安（10a当たり）

資材名	成分量 (N-P-K%)	施用量	窒素 成分量
ノルチツソ	15.5-0-0	1/2袋 (10kg)	1.6kg
尿素	46-0-0	1/4袋 (5kg)	2.3kg
燦燦 (さんさん) あみの	8-6-7	1袋 (20kg)	1.5kg

(2) 元肥

葉の活力を維持し、貯蔵養分の蓄積を促進させるため、速効性肥料と緩効性肥料を組み合わせ、元肥を施用する(表2)。10月中旬頃に施用するが、礼肥を施用しなかった場合は、9月下旬頃に施用する。

礼肥の施用時期は早いほど吸収率が高いが、新梢の二次伸長を避けるため9月上旬ころに施用する。礼肥を施用できない場合は、速効性の窒素肥料のみ施用し、残りはなるべく早めに施用する。

表2 元肥の施用量の目安(10a当たり)

資材名	成分量 (N-P-K%)	施用量	窒素成分量
みらいろ物語 もも基肥	12-10-3	6袋(120kg)	14.4kg
みらいエース	8-10-3	5袋(100kg)	8.0kg
エスコン580 (エスコン化成)	15-8-10	1袋(20kg)	3.0kg
			計11.0kg

3 秋季せん定および縮・間伐

(1) 秋季せん定

ア 目的・効果

- ・樹冠内部にも薬液が届くようにして、秋期防除の効果を高める。
- ・樹冠内部にも日光が当たるようにして、骨格枝の基部付近に着生している中・短果枝まで花芽の充実を図る。
- ・休眠期に除去すべき徒長枝を除去しておくことで、休眠期のせん定量が少なくなる(弱せん定になる)ため、次年に発生する枝の勢いが抑えられ、優良な結果枝を確保しやすくなる。
- ・徒長枝が太くなる前にせん除し、休眠期せん定時の切り口を小さくし、凍害や病原菌の感染リスクが減少する。

イ 時期

収穫が終了している早生～中生種に対しては、早生種から順に、9月上旬～中旬に実施する。

実施時期が早すぎると二次伸長が生じ、せん孔細菌病の感染リスクが増加する。また、逆に遅すぎると、貯蔵養分が蓄積された枝を切り落とすことになるため、適期に実施する。

ウ せん定の程度

樹勢が通常～強い場合は、図2に準じて実施する。主幹や主枝が枝葉の間から透けて見える程度まで実施し、過度に枝を切りすぎないように注意する。特に背面枝は、日焼け防止に必要な枝を適度に残す。

高温乾燥などで樹勢が低下している樹や、せん孔細菌病などで落葉が多い樹では、実施しないか最小限度(樹冠内部に発生している長大な徒長枝を間引く程度)にとどめる。

エ 秋季せん定のポイント

- ・樹冠内部(主幹から半径2mぐらい)の、骨格枝の背面や基部から発生している

長大な徒長枝など、明らかに不要な枝を中心にせん除する。骨格枝の先端付近（全長の 1/3 程度）の枝は、樹勢の維持に重要であるため、この時期にはせん除しない（図 2）。

- ・徒長枝や背面枝は基部葉を 4～5 枚程度残して、基部に副梢や小枝がある場合はそれらを残して、せん除する（図 3、4）。
- ・結果枝のせん定は、この時期には実施しない。

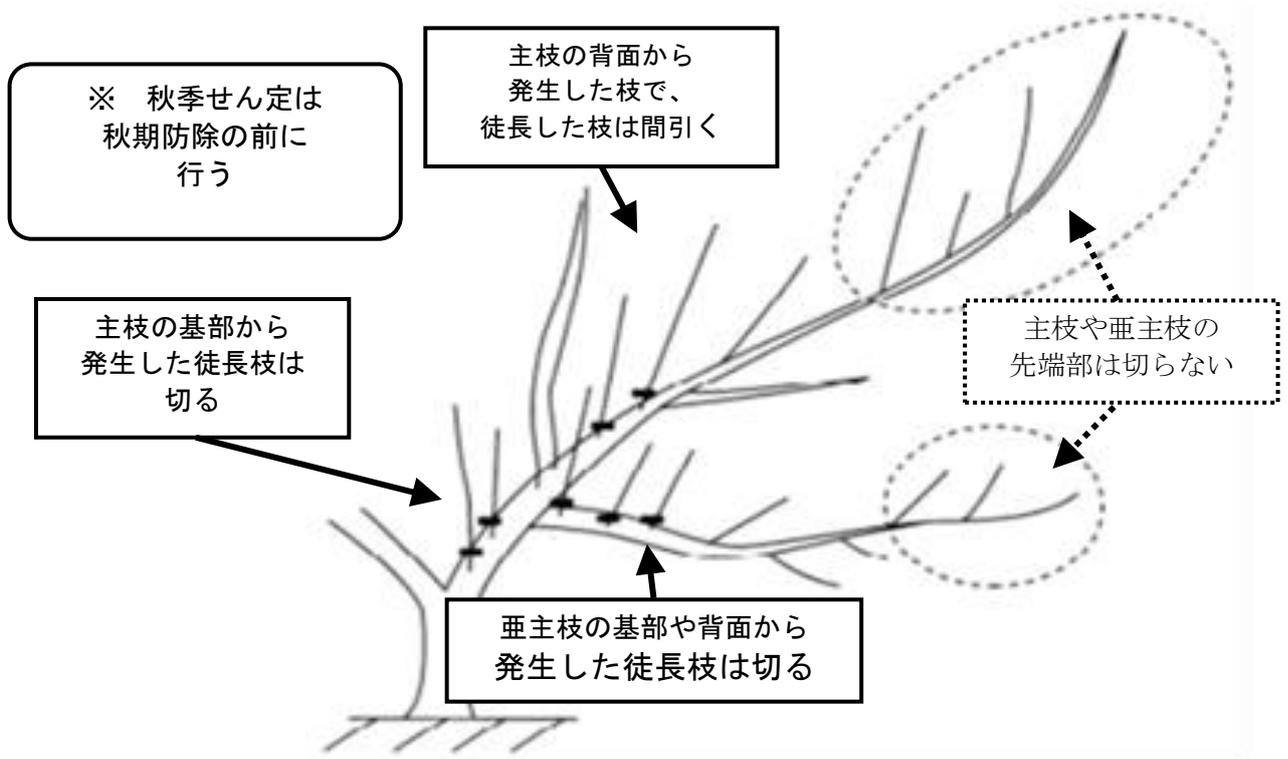


図 2 秋季せん定の対象となる枝（—：せん除位置）

A：基部に小枝のない徒長枝の場合



B：基部に副梢がある徒長枝の場合



夏の間の新梢の摘心などにより、副梢が発生している場合は、基部の副梢を残して切る。数多く残しても混み合うだけなので、15cm以下の短い枝（図中の④⑤⑥の枝）を残して、あとはせん除する

図 3 副梢がない徒長枝の切り方

図 4 基部に副梢がある徒長枝の切り方

出典：「現代農業」より抜粋（元 J A ふくしま未来、藤島氏原図）

(2) 縮伐・間伐

植栽間隔が狭く、園地全体の採光性が低下したほ場では、縮伐や間伐を実施する。

採光性の低下は、果実品質の低下だけでなく、枯れこみなどの原因にもなる。枝の混雑が分かり易く、かつ、残った樹や枝が貯蔵養分を多く確保できるよう、秋季せん定と同様の時期に実施する。

3 モモせん孔細菌病の秋期防除

来年の春型枝病斑を抑えるため、秋期防除を徹底しましょう。

本病の果実病斑の発生には、春型枝病斑が大きく関係する。

春型枝病斑の原因は、前年の9月～落葉期における、新梢の落葉痕や皮目からの感染である。秋期防除はICボルドー412などの無機銅剤を用いて、春型枝病斑の基となる感染を防ぐために重要な防除である。

(1) 秋期防除の基準

無機銅剤の残効性は通常は2週間程度なので、秋期防除は8月下旬～9月上旬頃を1回目として、2週間間隔で3回を基本とする。近年の気温上昇により落葉時期が遅い場合は、3回目防除の15日後に4回目の防除を実施する。

(2) 確実な防除効果を得るための注意点

防除したい枝に確実に薬液を到達させるため、秋期防除の前に秋季せん定を実施する。また、散布ムラをなくすために、薬剤散布量を400L/10aとする。

なお感染予防のためには、雨前の防除が重要である。特に台風などの風雨によって感染が拡大することから、台風の接近やまとまった雨が予想される前に、計画的に防除を行う。

散布後に著しい降水があり、薬剤の付着量が減少した場合は、前回散布から2週間以内であっても、次の降雨前に前倒しで防除を実施する。

(3) 薬害の軽減

銅を含む剤は、モモの葉に一定度の薬害を生じるが、高温時や散布直後の降雨により薬害が拡大する恐れがあるため、散布日やその前後の気象状況に注意して実施する。

- ◎ 農作業中の熱中症に注意しましょう！
- ◎ 農作業事故に注意して作業を進めましょう！
- ◎ 農薬は、ラベルをよく確認して使用しましょう！
- ◎ 農薬散布後は、忘れずに防除日誌へ記帳しましょう！
- ◎ 農薬散布は、隣接する作物に飛散しないように注意しましょう！
- ◎ 適切な生産工程管理のためにGAPシートで確認しましょう！
- ◎ 気象災害に備えるため、収入保険への加入を検討しましょう！